

六十六 園丁と蝶の対話 「認識と言語を巡って」その十二 終章

園丁 前回は、対話を終局にしようとしていたのに、ウイトゲンシュタインの『論理哲学論考』に深入りしすぎ、しかも話が長くなって、焦点が拡散してしまいました。

莊周 そのことは否認ませんが、『論理哲学論考』がカントさんの認識論の延長上にあるという君の見立ては大きくは誤っていないと思います。そして、科学の発展した時代にあふさわしく整理された命題は、人間の認識の基礎を生物学的に探った君の議論を明確にするのに役立つと思います。重すぎたけれど、前回の君の議論はそれなりに意味があったと言えるでしょう。しかし、あの議論で事が成就したわけではありません。

園丁 そうですか。『論理哲学論考』は一つの階段を登ったけれども、まだまだ検討すべきことが残されている、と考えるべきなのですね。実際に、ウイトゲンシュタイン自身が、のちに、あれで終わっていないと考えて思索を続けましたからね。僕たちの対話の「その四」で少しだけ触れましたが、もっと考えてみなければいけないでしょう。

莊周 おや、君はまた、その議論をしようというのですか？。

園丁 いいえ。僕が言いたいことは次のようなことです。ウイトゲンシュタインは、言語

で論理的な議論を十全に展開できると思ったのに、人間の行為を一つ一つ点検して考えていくと、人間が言語をはみ出すことをしていることを改めて知ります。『哲学断章』とそれに重なる『ラスト・ライティンクス』の断章が、人間存在を知ることがどんなに困難かを明らかにします。僕は、外界に実在する対象の認識に注目して、科学的認識を頼りに議論をすつきりさせようとしてきました。しかし、最後に言語を介在させて意識に踏み込むと、議論がたやすくならないことがあらわになりました。意識の代わりに、一般的に使われる言葉「心」を問題にすれば、いつそう困難がはつきりします。人間の心あるいは精神は、人間に終わらない課題を突きつけてくるのです。

園丁 僕たちはカントに戻って態勢を強固にしようと思いました。しかし、カントは人間を洞察する文章をたくさん議論の中に記していますが、彼の認識論は基礎理論だし、実践に関しても理論的な根本法則を明確にただけです。それに対して人間は、普通は意識にまでのぼらない言動や意識できない行動をします。反省できる人間は、それらを全部引き受けて行動しなければなりません。それが人間の生です。理性だけではなく、感情も、生きるための必要最小限のこと以上の働きをしています。僕たちは認識と言語を一巡りしてみました。言語を用いる認識の先に広大な天地が広がっていることを知りま

す。

莊周 カントさんが満天の星を見上げてもらした言葉を真似ていますね。

L 認識の先にある公案 天地と人間の事象

園丁 自然科学が解明することは語ることができるとしても、解明しつくせると言える人はいないでしょう。物理法則はいつそう普遍的な形に統一され、その構成する理論体系はますます簡潔に整えられています。しかし、さまざまな階層にある物質が現実を起こす現象は数えきれないほどあって、その一部が解明されているにすぎません。砂浜を散歩しているわたしはときどき美しいものを見つけて喜びますが、見つけられていない事実の大海が眼前に広がっているのです。自然科学の営為は、人類が存続しているあいだずっと続くことになるでしょう。

莊周 ああ、今度はニュートンさんの感慨をもちだしましたか。ところで、天地の間にある人間を見つめれば、もっと複雑でとらえ難くないですか？。

園丁 そのとおりです。それでも人は、人間の事象を見つめ、考え、語らずにはおれませぬ。言語を用いてする思考は、基盤にある神経回路網の情報変換の働き、論理を操作す

る力によって、どこまでもその営みを続けようとしています。論理的な命題の体系を構成してすつきりさせようとしたウイトゲンシュタインも、カントがそれ以前の哲学者たちの考えた「哲学」に敬意を表わして語らずにはおれなかったように、倫理について語ってしまいました。

莊周 しかし、積極的な意味のある主張としては、カントさんは道徳法則の形式だけを示したのだし、ウイトゲンシュタインさんは「哲学」の限界を規定しようとしただけですよ。

園丁 そうですね。その上で、カントは、宗教や平和など人間の现实生活に関わる問題について発言しました。

莊周 そういう問題は、ウイトゲンシュタインさんの言うように、哲学の問題ではないと考えるべきだと思います。君は、フッサールさんの哲学を批判し、現代哲学のいくつかの潮流を批判しました。君の立場からすれば、その種の考察とは違う態度で問題を考察すべきなのではないですか。

園丁 そうですね。人間の事象についての考察は人文学と呼ばれ、人間社会の考察は社会科学と呼ばれます。自然科学に準じた科学として考察できると見なされているわけです。そういう学問領域を論理的に考察することはやはり必要なのですね。

莊周 ということになるでしょう。まさかそういうことを最後にやってみようというのではないでしょうね。

園丁 まさか。そういうことが園丁にできるはずがありません。でも、平凡な人間として「心」のことはいつも気にかかります。人間の心はとらえきれなくて、それを語る種は尽きません。

莊周 心という言葉を使うと、感情まで含まれて人間理性はとらえきれなくなって、問題は一気に拡散してしまいますよ。

園丁 話がずれてしましますが、心に関係していると思うので言いますが、『存在と時間』のような実存主義の物言いは心に迫ってくるものをもっています。そこには、生きている人間の心が直面している課題がある、と僕も思います。しかし、その切迫感だけでは、直面した現実に対して適切な行動をとることができません。ハイデガーでさえそうでした。人文学や社会科学を、現実在即した論理の運用だけで科学的に探究し、少しずつでも確実な知見を積み上げていくべきなのだ、と僕は考えます。

莊周 そんなことは誰にでも言えることです。言うは易く行なうことの難い課題です。

園丁 はい、でも一言言わせてください。第四回の対話で竹田青嗣さんの主張を考察しま

した。竹田さんは、社会科学の問題を考えるのに、フッサールの哲学を基礎に置く必要を論じました。そして、「欲望論」という言葉を使って、哲学の問題として議論しようとしています。欲望は論理に乗せることの困難な概念で、哲学的な議論にならざるをえないのでしよう。しかし僕は、哲学をからめて出発するのではなく、社会科学の問題を初めから具体的に探究する方法の方が実り多いと考えます。

もう一つ、哲学に関係することとは別の話ですが、神経系のことを考察しようとして、『脳科学の教科書 ころろ編』のことに触れたとき話す機会がなくて、気になったままのことがあります。その第4章に、「〈人間社会〉とは、実体のある物理法則から乖離した、人間の精神世界の中にのみ抽象的に存在する〈象徴的世界〉なのです。人間が言語によってつくりだした世界です」というような記述がありました。僕は、人間社会をこのようにとらえる考え方に驚きました。人間社会は実在する対象です。それに対しては、今言ったように、自然科学にある程度準じた科学的な考察をすべきだと考えます。社会科学の存在意義はそういう研究方法にあるのだと思います。

荘周 とりとめのない話になってきて、君は身のほど知らずのことをしゃべっていますよ。話を転じましょう。

園丁 ああ、そうですね。口がすべってしまいました。

園丁 「心」に関連してもう一点気になったことがあります。じつは、脳神経系について勉強しようと思ってよい書物を探していたとき、A・クラークという人の『現れる存在 脳と身体と世界の再統合』が目にとまりました。十五年以上前に書かれたものですが、認知科学の領域で知られた著作のようなので読みました。この書物は、「心」の科学をめざす連携が認知科学の名で進められていて、その目的は思索そのものを物質的に可能にするにはどうすればよいか理解することだと言います。最初の研究の背景を述べたところに、「心を、身体、世界、行為が絡まりあった不可分なものとするイメージ」がハイデガーの『存在と時間』にすでに見られるとされています。先ほど突然ハイデガーの名を挙げましたが、心を話題にすればまんざら無縁ではないのです。僕は、そこですでに、人文学や社会科学の厳密な学的研究が大事だという考えを述べましたから、認知科学のこの書物でも覚めた論理性が貫かれていなければ批判することになります。

この書物は人工知能の分野もとりあげますから、物質的な対象の研究につながっています。ですから、自然科学的な研究態度に期待がもてます。広く関連したことがらに言及しているその内容に有益なところがある、と思います。しかし、それぞれについての分析的な考察の不十分なところがあるのか、それらの知見の総合にも問題があると思

ました。僕の気力も底をついているので、簡単な感想を話すだけにします。十五年以上前のロボットは初期段階にありました。現在の人工知能も人間の認識能力から遠い状態です。そういう段階のゴミ集めロボットがゴキブリに及ばないのは明らかですが、著者は、知能をほとんどパターン認識という言葉に縮約してしまいます。パターン認識だけで心の精神活動を生み出すことはできません。そこで、環境との相互作用によって生じる生物の活動全体から心が形成される、と見なします。もう一つ、ロボットを組み立てれば余計にそうですが、外界をパターン認識するのに、思考をつかさどるコンピュータに加えてそれに連結された複数の動的な部分が必要です。そこで、結局、心は、脳の中にあるのではなく、「脳と身体と世界の再統合によって創発する」、という考えを結論とします。

この結論は、僕たちの前回まで議論してきたこととくいちがいます。僕は、普通の言葉で言つて、人間の心は人間の中にある、生きている身心に心はある、と思います。生物のにとらえるときも、身体に組み込まれた脳・神経系が主要な役割を果たして精神活動が生じるのです。心はそこにあります。心を皮膚の外にまで広げる考え方は、人間の問題をあいまいにして拡散することになるでしょう。

莊周 わたしの考え方も違います。脳と身体と世界についての先人たちの思索が軽々と



無視されているように思います。こういうのが現代の思潮なのですか？。

園丁 僕たちはカントの認識論から対話を始めました。ヨーロッパでは認識論という哲学用語には別の単語があり、日本語の認識に当たる英単語は cognition だそうです。この言葉と科学をつないで研究する分野を認知科学と呼んでいます。認知科学は、生体が情報をとり入れて処理する過程、知的システムや知能の性質などを、科学的に理解しようとする広い研究分野とされています。すると、哲学が問題としてきた認識もこの中に含まれます。ところが、日本語では、認識と認知という二つの言葉はかなり異なる意味を表現しています。そして、認知科学は、科学という言葉に引きずられて、既存の哲学的な認識の考察から遠ざかる傾向をもつでしょう。

僕たちは、人間が外界にかかわって外界に働きかけて生きることが認識活動と考えました。こう考えるとき、認識は認知科学が考える認知と重なります。そのとき、身体に組み込まれた脳・神経系が主要な役割を果たして生じる精神活動を、人間は「心」と呼んでいるのだと僕は考えます。ウイトゲンシュタインが言うように、認識、意識、精神、心などの言葉を、明晰に識別して使用する必要があると思います。ひよつとすると、認知科学を研究する科学者たちにその考察が足りないのかもしれないかもしれません。おっと、また、口がすべりました。

莊周 君の集中力も限界に達したようです。話は終わっていないようですが、心についての問答は別の機会に譲った方がよくありませんか。

園丁 えっ、……。分かりました。これ以上無理をするのはやめましょう。

「認識と言語を巡る」対話の終章を飾るにふさわしい議論をしようとしたのに、できませんでしたね。尻切れトンボになります。最後に感想を言って終わりにしたいと思います。カントは、「いったい諸君は、およそ一切の人間に関係するような知識が、常識以上のものであったり、また哲学者によってのみ諸君のために発見されることを欲するだろうか」と言いました。単純な僕は、この言葉を信じて、僕のような者にも認識や言語について少しは考えることができるだろうと、こんな身のほど知らずの試みに乗り出したのでした。

莊周 そう悲観することはありません。『対話篇』を書いたプラトンさんが、「ひとがりっぱな事柄をやってみようと試みるならば、結果としてどのようなことを経験することになるうとも、その経験を身に受けることもまた、そのひとにとりっぱなことなのだ」と言っていますよ。君のしていることがささやかなことだとしても、何かを受け取るのですよ。君の夢の中のわたしもいっしょに喜びましょう。

11 園丁と蝶の対話 「認識と言語を巡って」その十二

二〇一八年、二月